気まぐれ ながの情報

第４号
発行者 幸井 忠
〒３８９－１１０３
長野県上水内郡豊野町大字蟹沢1179
TEL 026-257-3461
FAX 026-257-3461
E chu798@janis.or.jp

小川さん県知事賞受賞

去る、十一月十四日（火）から十五日（水）にかけて、上伊那郡南箕輪村にある信州大学農学部において「ＪＡ長野県リーダー研修・交流会」が開催されました。

二日目、「農業青年の主張」という部門の発表がありました。

それまではまったく気づきもしなかったのですが、なんと発表者の中に伊那市在住の小川文昭さんがいるではありませんか！一年に一回も会えばいいところなのに、こんなところ（失礼！）で会えるなんて・・・。細かいことは割愛させていただきますが、ホント、驚きました。

発表の中で、私が一番感激した言葉は、「小川さんがここで田んぼをつくるようになってから赤トンボがとてもふえたわよ」と、近所の方から声をかけてもらえたというところです。農薬を使わないということは、現代の農業事情ではなかなか難しいことが多いものですが、その心意気を感じ取っていただけたときの感激はご本人でないとわからないことでしょう。

さて、気になる結果です。発表者は県内各地より選ばれた四名のなかで行われました。そして小川さんは見事、「県知事賞」を獲得されました！もちろん、田中康夫県知事の名前が入っていたことはいうまでもありません。おめでとうございました。

続いて「ＪＡ青年部活動実績発表」が行われました。発表者はやはり四名で、地域に密着した、県下各地でのさまざまな活動が寄せられました。

私たちの「ＪＡながの」では、今年初めて取り組んだ信州大学教育学部との合同プロジェクトについて発表しました。これは、同学部が学生に対して「地域の子供たちとのふれあいを軸に、実践を通じて学生自身が教育を学ぶ」ということを目的としたプロジェクトです。私たちＪＡサイドは、技術的なサポートをするというものでした。

「関東甲信越代表も夢じゃない！」と冗談半分で言っていたのですが、プレゼンテーションもさることながら、実績を積んだつわものの登場で、結果は三位ということになりました。

『「スロー・フード」に帰ろう！』（後編）

そもそも「スロー・フード」とは、「ファスト・フード」（短時間で提供される食べ物）の反対語なんである。日本人の多くはこれを「ファースト・フード」（最高の）と、間違って呼んでいたりする。アメリカ人が聞いたらきっと狂喜するに違いない。だって彼らはそれらを『ジャンク・フード』（直訳すればガラクタのようなの意）と呼んでいるのだから・・・。

まあ、それは半分冗談として、二十一世紀の「食」について私たちはどこに向かうべきなのだろうか？

そもそも 食文化の変遷

これは単に「家庭的である」ということや「安全で健康な本物の食品の追求」ということだけを指すのではないのだ。

「飽食の時代」から「豊食の時代」へと変化すると は、「お腹いっぱい食べたい」→「いろいろ食べたい（グルメ）」→「いつでも&早く食べたい（ファスト・フード）」→「機能性食品」と変化してきたように見えるが如何だろう?。

そして来るべき二十一世紀、私たちが目指すべきは「スロー・フード」を置いてほかにないと私は思う。

ということ。つまり、「食を通じて人間の生き方そのものが問われる時代」がやってくるということなのだ。

地球はもはや「ボロボロ」である。土地は痩せ、資源を浪費し、必要以上に家畜を生産し、また、消費し、ごみを大量生産する。まったく持って枚挙に暇がない。

人間の欲望にはきりがないから、「いいかげんになさい！」と、地球に痛いお灸を据えられてからでは手遅れなのである。

「万物の霊長」などと有頂天になっていて、知らぬ間に地球を滅ぼしてしまっては何にもならない。

二十一世紀、一人でも多くの方々がこの「スロー・フード」に目覚めてくれたならと願わずにいられない。

『小川さん家に遊びに行こう！』

小川さん家は、長野県伊那市にあります。南アルプスが間近に見える絶好のロケーションで、こだわりの「お米」を作って、はや１２年。幾多の困難にもめげずに、除草剤や化学肥料、殺虫剤や殺菌剤までも使わないという徹底ぶり。

「米を生産するだけではダメ。農作業を通して、いのちがたくさん育まれる環境を手助けをしているのだ！」という信念のもと、日々、農業に勤しんでいる方です。

興味のある方は是非、一度、小川さん家へ押しかけて見ては如何でしょうか？

長野県伊那市美すず青島10674
TEL 0265-73-7548

『編集後記』

来年は、「新しい年」・「新しい世紀」・「新しい千年紀」という新し尽くしの節目の年となります。本当に感慨深いものがありますが、人類にとってこれほど後世に語り継がれるであろう「瞬間」はないと思います。二十一世紀の第一歩を、私たちはいったいどんな未来を描きながら踏み出すことが出来るのでしょうか？

本年もたいへんお世話になりました。おかげさまで今年も無事、過ごすことができました。これもひとえに、皆様方のご贔屓の賜物であると、心中より御礼申し上げる次第であります。ありがとうございました